丹鶴叢書

草根集　九

093.1
2006
年
月
日
佛教大学図書館
2005494836

草根集第九

寛永三年正月朔日試筆

初春祝　[illegible]

梅花風　[illegible]

住吉社　[illegible]

五日武田大膳大夫信賢家

霞始聳　春のそらるたかの羽衣のたつ[illegible]

暮春雲　[illegible]

手掬亟　[illegible]

薄暮鐘　[illegible]

六日畠山修理大夫入道覚良家ようく

霞知春　はるとるもの霞よりなのあるとやゆる百ようの鳥の音

池山吹　ゆるもあるをたてゆのをつくさくさるる山ふきのもに（二本）

雪蘋恋　深のさきるふ水あるといなむ世をぬかまるふ三浦

山家春　氷ゐ行の綱ゐおくくて彩をのゐてかもも梅ようを

七日ある人の行るく彩をさるるく

初春霞　あらふて霞のみをそさるのる流やん花の日のもに

逢　恋　をくををを思ひさむをるを思ひのとく教とををめあ世も（もと　けと）

旅宿嵐　はるををいて枕となのをむあのあしを思ひ立とく（とと）

十一月細川右京大夫勝元家のとを始る

松聲多春　宿をるをを松もあるるのをを世ふかつをををのもを聞る

三　春　初霞ををつの浦ふをををつはをのの（二本）行るるの霞

祈　恋　ようたのの恋をを人の行るるもみををとをぬ神ふをる心

眺　望　夕霞ようかををみるめる遠のたをや彩なるらむ（二本）

十七日法川右兵衛佐義鑑家ようく

初春霞　はるのをを明るをををふるをの霞浦をををあむを

池岸藤　春日ふを彩ようの後ゆををく波ようの浦をる波の岸

聞音恋　思ををいひををるあををふををををを彩の山を

関路夕鐘　夕日をを坂村おををを坂の関るををかを彩のをを

十八日山名兵部少輔教之家の月次ようく

庭梅冬薫　ふるさとの梅の匂ひをまくの葉に冬籠りする春の来ぬる

當坐鶯出谷　かへりこぬ鶯をこそ待ちつるに谷川の水の音のみ

寄旅恋　たづの人まどしんよりほゆ旅の空よりこそ

曙峯雲　かすみよりさくらをもみやまのすそにたちそめの彩

廿一日冷泉宰相持為の家にまかりたりし次よみ

ふのあるこしふ

當坐表頭霞

山路のさくらはいかにけさやはる彩る雲むさの山岸

あさぼらけなき雲をまつ春のの網代の三俣

鹿

千鳥　つの浦のまさごの数をまつ千代の始ふ浜ちどり

為邦卿為平卿持為卿三代あつる也

子規

旅恋　まくらかるまくにこがれてふるさとをやとりもんなきさん

山　このまくらもきかぬ花ぬさんぬるの山のるの水

廿二日一色左兵衛督教親の家の月次よ

松間春　いまもまつるこがれのまち千年をかさねる松のもとめふ

當坐霞　ひのこの雲のこをふまほけくらかすみの山つをを

忍恋　忍ひもこをををるやるこのあ山のあくのあやさらん

待恋　いそ一日をたのみくること又をまつたのそて吹ふ浦の

鷺　ゆそたせ〳〵流のおもる松の移よ白波ちをて浦ふ鷺の

廿四日大光明寺殿に法花百部をやとりもんなきさん

祐義なく月次ふらまこる

初春見鶴　雲ハもとゝ霧もたちよりつゝ野の初風も寒き浦の日の影

餘寒（當坐）　風さゆる夕の霧のむら消ふ又りそ出る明ぬ人のそゝ

厭　恵　いとゝ寒て我住さとを恵る秋ゝ世ふ人ハ見やすかんん

田家　もる人のふりの宮やゝ屋ゝ雨の窓の窓せ夕ゝも

神祇　そのゝかゝと社ゝまつりあて清ゝみゝぬ神為

二月四日右京大夫の家のそゝ

山霞　緒を縄ひけるや霞まゝの杉原の山のもの杉人

宮夕恵　たゝゝゝやたゝゝ時も詠なゝぬ伴ゝゝ杉ゝゝ

水郷　花島のあゝゝ川ゝ里ゝゝかゝる河柳を枕ゝゝ

十日三井寺佛地院侍従ゝ兼坊の月次ゝ

山家柳　山ゝのなゝゝのゝみゝまゝつゝゝもまゝ山霧ゝ柳の系

夕待花　やま稀たのゝかゝる白ゝもまゝ偽のゝ玉ゝ夕ゝゝ

惜名恵　名ゝ延のゝなゝ恵ハ宿ゝゝ攻院ゝ人なのゝゝ

河春月（當坐）　河ゝゝ川ゝのゝゝやゝゝゝゝゝ霧の衣ゝ乃月

見恵　ほのゝゝゝ霧の内の白ゝゝ花ゝ白ゝのゝゝ拾ゝ川

寺　妙のかゝもゝかゝく弱ゝゝ法の白ゝ為の水ゝゝ

十七日細川上総介氏久月次ゝゝ

庭松春久（當坐）　ゝ雪ゝ松ゝゝ伏ゝゝ清ゝの庭のゝゝゝゝ氏乃ゝ（數一本）

朝春草　まゝゝゝ人のゝ業の初ゝゝゝゝゝゝゝの新ゝ

早秋露　我袖のふるゝ涙の清ゝゝて又ゝ秋ゝあゝな

恨　恋　世をうく物は恨とおもふ人のうきをうけ又やせられむ

古寺嵐　なつかしき法の法師のあり消ぬいとも風や待さそらん

十八日　出羽国の人道浄元の家の月次

霞添春色　ちすとなり法の雲はあるとも春のそこ〻き木の枝

早春霞　当座　たちやさる織女もたちし彩の雲の霞の羽衣

霞春木恋　身をうとむとも匂ひもなきよもの花の彩の所に葬ハ

春古寺鐘　山の端や川せゝの彩も落る涙と霞あるそこ

春旅泊舟　いとなみたちの孔雀の山の風匂かちのまくら小

十九日　修理大夫家の内の月次

梅屋露暖　梅のもの園をとく堤のもつえとくる露乃小もも

帰鳥　当座　たえとく巣の高の雲の人の羽風とかるる

顕恋　思のまゝをこの法師とて思ひ寄ぬるをとく法

廿日　赤松刑部大輔教貞家の各月次

花契千年　当座　匂なくる庭の枝えるとの花の月を

霞遠尋　〻彩れ花の川清ぬとの行ハ雲の彩る沖つ

依涙顕恋　あやめさとて板ま〻とう濡ぬ園の道を雨とふせた

山館煙細　住人もあるなきの谷法師の家の煙やたのいとゆ

廿一日　細川右馬頭入道　賢家の会始

風静花盛　花の枝も風さへゆくまれの蔭まとる庭の匂ひ

答　当座　梅　もえ出る彩のもとかくや社とく孔く匂ふめる

古郷荻　宿るは昔折毎に移る床に荻のもとに秋せるかな

時雨過　雲ちぬまの山陰に霧こめて時雨は庭にもれのこるなり

廿一日清水寺四十住心院の心惠法師（律一本）弟子心孝（仁一本）ら多まかりて一周忌の仏事の次に五十首の詠ありけり

山早春　ひしみもちもめつるる辺山もまだ烟や雪のあらぬ

落花多　さかりぬるかぜ日も今の内ちくあはれものかなと散るよ

松藤　咲ぬるかはくくなるひさかもつえ枯ぬる岸の松ぬ（そ一本）

夕雨　独ぬらぬなるきのたちにたちさかれのちの雨

旅泊　人の無ぬるまれ冬をふ今かくるむ一日の漁戸

廿三日。草庵（招月一本）にて（人々まかりて月上）一座あり

朝山霞　ぬるるるて山の間ふ出る日の石倉るもものさもろも

海邊月　ちのけく果なるさはもり月のさるまつる浦の石

閑時雨　くれるるふる人なるのもの浦の園の時雨とて

待空恋　まつ波ふたのめるぬ空まの山路くぬこの浦風もし

遠村煙　なるるん家の嵐の山ふとるまて烟ぬ

世ある家人ち清もちく事山の花ん山のかくく

ちふ盛ぬしるる花ぬ若ち寺より清

水寺るまちの毛静くるまてみしよ雙林る

のよる巡月ちや昔康新入道のまる高ちうの

住る尾宝のうちもあくなるまでなるをかの垣ひとつ（八一本）（うるさく一本）
へてさるまの尾ふ立入て日をくらし住つゝ秋ふ
世をのがれ人〳〵をみて中ふ

初夕花

花みをもとめ及ぶる里に一枝もあまりて旬に花摘ぶ

暁花

花ら摘むゝ夕ゝ嵐あれのゝ松やゝ枝のゝ花ら

惜花

花ぞるゝ花しもむふ月ゝ日ゝ花ゝ花の色
もみゝなゝ春ゝ月の日ゝ色あむもの山ゝ世
世ふるゝ松か浦の家ゝ読ふあゝ

春交花

月もゝを日ゝ月ゝ詠めゝ多海ゝ春の月
花ゝ花ゝ世ゝ歌むゝ山ゝ花の市ふ山ゝ

侍恋

たのむゝの恋ゝ山ゝ松の恋ゝをほゝめて月ふ人ゝ（ね美）つる

寄苔恋

恋ゝ山ゝをうゝ苔の下ゝ恋ゝ雪ゝ人ゝ恋ん恋ゝ人ゝ問ゝ（苔一本）

古寺

人ゝ恋ゝ法ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ物ふ恋ゝ物ふ恋ゝ人ゝ恋ゝ
世七日三井ゝ寺ゝ恋ゝ小の別ふ恋ゝ人ゝ

尋花

花ゝ尋ゝむふ人ゝ（八一本美）ゝ我ゝ入ゝ世ゝ尋ゝ人ゝ

関花

花ゝ関ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ関ゝ恋ゝ世ゝ

延苔

延ゝ苔ゝ延ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ
廿八日人ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ
秋の中ゝ人ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ

孤島霞　ゆくへなくなる人ぞのこりけるあまの沖つ島山（拾遺）

夜思花　花もさそ春の思ひのふかさをしらくもゐにかをる

寄櫛恋　うやうやしきしらんかなもとのあるぬ匂ひのつまの乱（下一本類）

寄筆恋　かひなくやまぬ墨にぬるるのうきをぬ墨の乱

水郷鳥　えてこそぬるるやうの恋するまうみぬものみやなりやと

廿九日同寺南別所のもとをみく影を拾く奥滝

寺ゝちこゝろ絶るく故諸をしふ

嶺上花　花とうへもとおしくいりつる風のまこの移のもく雪

磯邊花　くさきの波山掘まのよふ舞をする海士のいさり火

寄花懐（述一本）　光景ぬらさくもみやうん又ハうもさのやへ雲

三月二日佛地院信教長算坊月次ゝ

春雲　せハもそのあるとるる思ひふまぬ梅のやをふるとろ

春鳥　もろ山やをもるとかくのもをふもし百よの鳥を鶯をする

春鐘　なのめつる人ゝもの松文やてまつ待をの入おのもとる

曉（當座）　鶯　をの月の中清く鶯のあるの匂ひかをもむ山の松

隔恋　人ゝうあつての秘中をみをもなるみのよ新く

浦鶴　あをもをて山松ふるひの浦さひぬ波千の杉をふ山ぬ（九一本）

四日右京大夫の家の月次ゝ

鶯　もををををさをふをもをを杉のをふ松ををる鶯のこる

待空恋　たのむをのの中る秋よをもををぬかををのをの中の白露

門杖　まつのとのさし入にける杖もしらぬ身にも栖をとてしる

八日思徳院の廿日ぶ南風ふくをへしとむとし

やさるゝにはなひのつくゝ付たし侍る

藤為松花　藤浪のむらさき千とせまつのえにも及ぬ世のをやうらん

常坐 山霞　まさごの霞の光就てはるかくもぬ山の色の末

夜鹿　秋のよのくなかさのつまと鳴なく鹿はおる様も宮

宮露恋　消もうき深き契にしみのあさまの露らの袖の夕露（と 一本 类）

懐旧　いつまでもあはじと昔のそのむかしまでへしもあやなし

十とせも今ぞまよ夢の後の身のしもなく南都に下向

せしを十年よりて雨つゞきむくは茫国になりて法に

孝拾

逗留せしみなかの廿三日まさなきのまどの小尾にふく人に（たまくらよ 一本）

一読まうめ侍りしに

霞障山　雲白さしむ天の岩戸の扉よりも山は霞をこむる

宮草恋　きみにあはず契の数はりさる草のつま梨の色

旅泊船　湊風あられいかにしやの夜のうらくん枕の波に舟そこにて

同日夕成就院法橋清賢昔よりやどりにて侍る（侍 一本）

あかつきのはその影をさくら

翫花　花ちりのつくるまに袖に句をなさしぬがさしのむの色に（さ 一本 类）

苗代　むなしきや苗代小田にせめてなくみぬさまなるその色を

古寺　古くさき寺のふかきかねの鐘の音火も法の光なりけりや（ふ 一本 类）

廿四日南都仏地院とゝ所ゝくある人ゝゝ
よみおの中ふ

初春氷　流れの氷のくもゝてそう氷るいのちのしのゝさゝ
無名立恋　たのゝさぬ浮る雲のあき名よりたつの市海とゝ月新
庭上古松　流ふるき二代の松の産の松枝とゝるとみるやつはあき
廿七日泊瀬より手紙為法樂五十ゝ詠之在別紙
四月五日下向又来たるゝとの小屋もよく流ゝよみ
中ゝ

首夏風　交ゝゝふあゝきの風ていゝゝる水ゝあゝ六月の空
空帰恋　清水寺ゝゝなゝし昔ふゝゝ花芝の五月のかけ

田　家　小山田や秋のいなゝの伏をかゝゝの雲ゝゝ夕日色ゝく
十二日来たる正法院ゝゝ坊ゝく流ゝよみ中
ゝ

首夏卯花　交ゝて八社をゝ神ゝく音ゝ流ゝ卯もしのゝゝのさ衣
寄木別恋　形ゝゝゝゝもつめおくる松風ゝゝゝゝむる社の別流
残月越関　流ゝゝゝゝ月ゝつゝ関の戸ゝ所の月のまの川ゝゝ
十四日或小屋ゝく泊瀬法樂ゝく人のゝゝ
初春霞　初形山霞とゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
深山月　たゝ山流やゝゝるとゝれ流ゝ月やゝのゝる大海の波
尋縁恋　ゝゝよゝゝゝゝ流ゝよゝ人とてつゝ人とゝゝ流ゝくハ

鐘音出　まさごの子清かきもとにかやの戸あけそめる

十七日興福寺別院菩提院内傳經院と云坊

みくまの影をさくるもとく

林早夏　あをなすこの嶽の林の陰やもれかのこかるる夏きふる

夜水鶏　おやかきき水鶏より山川は又宮ちくく水のふる

窓烟恋　立のぼるゆの烟をけちやらて夜のおもはふる深のなか

十九日成就院法橋清賢の息栄如法九のつるを

みくく一座あるこふ

郭公　時鳥こゑもしく宵の郭なくこゑる行のふまち時間

遣水　くるみるこゑくの島ゆ出く絶をぬ座の出をゆ

廿日ある春日社より奉納中付こ一百こ獨吟

法樂在別帋廿二日同宮奉納成就院法橋清

賢法樂三首懐帋ふ

雲間郭公　夜ゆもやめきくてのぬきを音きあるもなるぬ郭ふ

夏夜易明　山のこふ出るをとんと林の戸を明はあるる夜のよの月

社頭松風　姫くと神のこゑの松風と七歩の苔の神よきこつふ

夏　夕　当坐　年歳の時の流の沈ふ中みのける夕月の新

夏　湊　こくと歳あつ水のこふふのきる中遠の四るとるん

夏　蛙　蝉一本　係なる夜のあ風吹きて情の蛙一本あるきこる

五月朔日成就院にて法会あるこふ

早　苗　立民もこゝ国のこゝろの社とやこゝにしる苗とを宮こゝり

待空恋　月はもちく待ぬ人よ世もをすぬを世つき鳥のあ沈

蕭寺松　嵐ゝの雪もおきあつぬ松よ立るかゝものゝ色ゝ

二日三日八上洛をこゝを銭別とく清水あゝ

山朝霞　霞立ゝの世ゝ山ゝこゝの毎ゝ宮ゝ世ゝの歌あ汗

逢夢恋　おとゝをぬ枕よ浮し世なを世やあひゝあり川の夢の波八

三日帰洛。右ニ闇　佐の家よく清水あゝ

更　衣　掛ゝ神ゝ入る人やゝのゝ衣ゝ

江　蛍　友ゝの昔のゝるの思ひやゝ世ゝ宮もゆゝ

河邊鳥　白ゝるの水よ彩ゝぬゝ鳥よゝひとゝて清ゝ

十四日修理大夫ゝ歌ゝ屏風百ゝの中ゝ

立　春　つなゝる山の雪やゝる春ゝ松ゝ立なゝぬさ衣の袖

池　藤　風ゝ波よ彩をぬをゝの色もゝ藤ゝ波の夏波

蛍　火　ほよ出る夏ゝを屋ゝ乳堂の玉とぬくつゝ沈

秋時雨　雲ゝ木もほゝ枕よ月をゝ雲ゝの秋の末

水　鳥　人ゝぬ浮の水よ傾ゝあゝ傾やゝ

見　恋　ゝ松よ見ゝ人のゝあん人ゝ人をつゝ

暁　雲　ゝ月あゝゝ山ゝ月ぬ歌ゝ

十九日細川ニ於大浦彩入家ゝ歌を拾ゝ

新　樹　屋ゝ屋ゝ屋ゝ深ゝ沈ゝ

題　恋　夕やのあまりつもりしものなれはの袖にかくるる人の袖かな

島　鶴　ゆくるるとひかるるまもぬふる雨の晴ぬたのの鳥よりる鶴

卅日草尾月次

採早苗　早苗とる田の水もぬかるの緑とる稲の根ねえ

逢増恋　恋とかる稲ねとる人をおくとまさらを浦の塩なる

遠村鶏　里あるとやゆつるの坂ここるいるゆるるとのしつせ

郭公頻　郭公田中の杜(松一本)ものかつるる早苗の稲とおとる

時驚恋　いつさてやる田のもさのひさすらにやぬもつ見杜の音信

路　芝　学ひんやとてのと我ていて(ちり一本類)田ここなるぬたの芝学

廿六日ある人の一座奥(佐一本)ものしふ

松影浮水　座の面よせこ入くみよ松のその姿をぬ影て水のこ

夏草深　夏草のみとこの河のこをつたてるの中の松の一本

氷室風　氷室山氷の室ものこ人の風をすしこ

故郷恋　人ふはちこをつこ契のまりこ恋の

海路雲　船ほこなる伊の帆根接をかこ風をあひる

六月朔日三井寺へまここ佛院僧都長算坊の月次

名所氷室　社ぬしる多やこの氷室山世序を形こ心こ

晩夏涼風　六月の照日もこぬたの世なこのこやこ社やこる

悔前世恋　業世こ(こ一本類)ぬこ多よやまりのこいこもあるる氷のここ

當坐
夏塵　風のつよき花ちるさかりの風妨せる宿の庭夏の色

夏杜　ちるあるとそ氷のあるは時ほとゝぎすのかくれる杜の木陰（も一本）

夏延　やまとなるとそふるおのへそ一夏もとゝきはの延なる水（ね類）

夏夢　世のまふあるる夏月まくはみてはゆめ夏八杜の秋

二日勝学坊にて所にて題をさくらく

早夏水　打ちせのそもかをまてゝ重ねる山ほとゝぎす夏の流

顕涙恋　思川あさまもあ流さくもうき名をもて社の上流

湖邊鶴　入鳥の海の浪打けと秋をやなひくふたの雲の上の鶴（え一本）

四日右京大夫の家の月次よ

郭公　ほとゝきすあるあと恨ちやの雲もかくるらむ

五月雨　さゝ波ハ夏の袖屋かまもとりうもき新の系ち

別　恋　もゝ色ぬくよかゝて衣のもたそむる夏のさ系

懐旧多（追加）　法よもりまた法のまたの数さ法のるとく弓

忘　恋　たゝのもも忘るゝをおひもる年法もちく人の夏（竜一本）

八日修理大夫の家の月次てに（あるしに一本）

夕立雲　夕立ハあるく（にあるく一類）雲まもく来るもさゝ夏の山

水風涼　山松のもつそうにしう風ふさ法ゝる池の涼さ

晴天鶴　久しの天つゝふ日に移もしつるのゝ（り類）もゝ

郭公稀（當坐）　花ゝ久ゝ庭る桜の法ゝ山ほとゝ山ほとゝ法

名所氷室　もゝつるゝ山のもゝ法ゝ山ほとゝ法の夏（まゝ一本）

宵風祈恋　恋[illegible]

古寺晩灯（夜業一本）　[illegible]

同日菅原利永[illegible]南宮法楽[illegible]百[illegible]

[illegible]

早春　神の[illegible]

国扇風　[illegible]

山月明　[illegible]

待恋　[illegible]

旅行　[illegible]

十一日大[illegible]

氷室　氷室[illegible]

夏草深　[illegible]（と一本）

適逢恋　[illegible]

田村竹　[illegible]（と一本）

十三[illegible]

早夏　[illegible]

螢火秋近　[illegible]

宵月尋恋　[illegible]

旅館嵐　[illegible]（に一本業）

神社榊　[illegible]

十五日金沢のとうまの寺日法楽として百首をすゝめしまゝ

若菜　堀めもおなる沼をとゝまる雪をやゝのゝ(み楽)ゝ摘ん

落花　かゝの世のとゝまるゝ春もふまる山路も雪とゝまゝ

更衣　立ぬる山の春も見しとくれ行くゝ日まあいぬる

山月　あるゝゝもむ山せ弱のやゝ新衣やゝ立のゝ山のゝ月

忍逢恋　人をゝかゝぬる夜のおゝゝ山へ雲ゝゝあるゝ恋人

述懐　まゝる山おゝゝゝゝのゝゝもゝの栄をむすゝゝゝゝ

ゝゝる芝紙か浦袁之ゝ楽ゝゝゝ寺ゝゝ月ゝゝ

汐法ゝゝゝゝ

旅夕立　坂下る木ゝのゝゝ夜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

沙月涼　おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

増恨恋　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

早夏(當坐)　夏衣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

樗　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寄山恋　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

釈教　彼岸ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十七日上総介家の月次ゝ

夕白　いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

納涼　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

野　水　とやまる梢の雨乃流れもこれぬきの清庭はきめとも
郭公遍（當坐）　夜とともに世よおもしろく詠るあるとふもるゆ夕雲のゐる
寄鐘恋　ゆき清のこゑよかるもたのくふ又つきぬくらふ（ちきり歌　もて一本）
江雨鷺飛　にのそいの流よまきくん詠るのもとる百もつのまのもとる

廿日草庵月次

河　螢　夏の衣うせもつるとも神ぬまるや常とつくむ
晩夏涼　ゆくる秋の水も夏あ杜の風かをく宿る谷の松のけ
遠　恋　思ひ秋の夢語をきこさめゆて八ふにもなれまさく篠原
春曙雲（當坐）　夏ようもまつるまるかつ消くもむるゆ巌のこと雲
沙月涼　思ひ新もるかきこをむ時の月よ雲おくせとの涙風

秋　田　あまよふ舟おの秋のほるこまぬ出ぬるをを浦る杜のう風
澤　氷　月をもむ時弟の法のこるよれ暗の床の氷了
旅宿聞鐘　松のもの月やまるこをこ砧の張秋の晴のの秋（時くこ二本歌）

廿三日左京大夫の家の月次よ

遠夕立　張人の袖ほるこ八百日行清の宿をき雨の夕立
樹陰逐涼　夏ふくそ世と張人もあふの雨の石の上の位ハ
杣川筏　みるまふ九月のもら杣川よなるそへてやはさもん
竹亭夏来（當坐）　宿の夏夏ふくるも家の竹のよのまるこしかそ人
閑中扇　まのなるふ雨の扇よ張ふ系のもるをぬ杜の風ぬるく（名一本歌）
恨身恋　こるるる名とる高よる法のかつて消し法の公法

山家苔　いほりの庭にしきつる苔も猶深くむしたる苔のいはやく

七月朔日南禅寺東禅院景南和尚の勧めにて

ゝく八景詩歌の色紙を染られし自分の人数（の加之一本）

哥方飛鳥井中納言入道祐雅息中納言雅親冷

泉中納言持為畠山修理大夫入道賢良細川

右馬頭入道道賢竟孝法印愚夢正広

遠浦帰帆　沖つせに立夕浪よするのかゝるとみえて舟のいそく哉（に異）

五日備前入道浄元家にて題をさくりて

稲妻　ちかくやかてのいなつまの光のまにも我世へぬらん

虫　山深きおくの奥まて鈴虫や聞まほしきに鳴ならん

鶴

みさこゐる磯辺にちかき松の間にすむ鶴の声

六日刑部大輔家の各月の会に

初秋見月　秋はなを今宵いつる月の影をあはれと見ん

霧中草花　色々の秋の花をむらさきにかくす霧の秋風

浪洗岩苔　岩ほにも浪のあらふ緑の色の深くも苔の衣（送一本異）

野径夕鶉（當坐）　床やあれし道もまよふ野の夕の鶉なくなり（む一本異）

寄衣恋　かくれなき袖やいぬらんたもとやめの袖の浪にかゝりて（ク一本異）

旅宿夢覚　まくらの夢の末のまくら枕のうへに月そ残る

七日朝倉弾正忠家にて読歌七十首の中に（十七一本）

七夕雲　くもりの中にかゝる天の川の雲のかけはしの天の川原

関霧　はるかなる雲井より関もすゑるやいつこもものの浦波

偽聟恋　さまざまに彩めおきてしたてもあるぬのうそはあるさ

山家水（ナシ本）　苔つたふ山とうるものみれんかなさもたつぬらさと

同織女　夕俤たなびの家ふく七夕そ清水の中ふ

七夕雨　玉川をやはまさらんなかるさの契をかをさ雨こそとも

船中翫月　いつるまもさらさるさとやなのこの月ふ帆おろ伊つ舟人

搗衣至暁　くらてすおもなきもはるるの独の別の衣なるら毎

懇切恋　露消ぬ野ぼちにのせん命かそ夕をとのやと

寄水釈教　あつるはいやうれはい水もはそ月も尋人

十日殿下一條殿ふる法樂ふく歌をるいふふ

手拍

蟬　うつるくる指のるみおとるさて（松一本類）杜のかをとふ堀の一こそ

椎　柴　山風の寒ふのつて日新ふも柱のうもの消ぬ雪のな

契　恋　たのおおけそとも軒のみなりふうふるつきおの浦波

恨　恋　葛なるぬにのるふ風ふそうみぬそとやんあるん

澗底古松（ナシ類）（ふ二本）　松ちさ深くやはるるもとふ谷の屋の一こそ

十二日ある歌ふく清ふあるふ

新秋露　秋ふそうつるる新まあふ露のぬきふの秋の地風

秋旧恋　庵の寄ふるさ保ふるるぬく我伊もみそぬ秋のな

秋夕搗（類ナシ）　みそもふ世のるのつふのそのふ搗の村の夕雲

十二日右京大夫の家の月次ふ

初秋露　秋きてのをしなべてかはるとはいはれぬ物は露の玉

瀧邊月　石たゝる瀧の音はかはらぬ物なれとはつ月の月

窓笛　笛の音のすさまじかりしかとはつ月の月

窓箭　あはれとも天のそらとはいはれぬ物とはつ月の月

河　秋の月　右類　西川や石ゝ所なる魚とはつ月の月

社頭　岸ゝ所ゝ住ゝの宮ゝ濱ゝ所ゝ人の家ゝ

十七日上総介の家のうた

外山夕鹿　遠山の月のをかしきなかの山のくれの月の下紫

秋尋恋　いつくにか月のかくれぬ秋の日の月のくれぬ

秋夕浦　おきつ風あらしはかはらぬ夕浦の月のくれぬ

十九日大光明寺にて詠歌あるべし

初秋萩　秋の野をやどりとしらぬ人の為にはやくもうけぬ萩の初風　上一本

池邊薄滋　初尾花秋つかたにはいとはるる

岸頭待舟　さもしらぬ秋の川霧ふかきとはいつくのおなしくれ

廿日草庵月次

稲妻　秋の田をほのめかしつるなりけりいなの妻ちるものかなしき

虫恋　秋ふかき虫のこゑにまかせてはいとはるるかな

悔恋　さてもいかにかはるとはいはんとはいはんとはいはんとはいはん　ま一本類

深夜月　更けぬるいつの夢の枕をとはいはんとはいはんとはいはん　く一本類　當座

暮山鹿　おしなべてかはらぬ秋の山なれとはいはんとはいはんとはいはん

宮の秋原恋（十七一本奥）　やさのや葵とふ名の神やしろ榊に秋の原乃はゝ草生

秋江草　弱法師の社のほなさふへくさぬ草ゆゑ神のよの春

廿一日常樂寺の月次ふ

草花　彩嵐四人の塔とあらはこ花のくさくさの露のら居

尋虫声　宮ゆくさまの系とやとてせんやて清りものあくら

樵夫　あもなくもやしなる雲の若さともてやこ山分の心人

夜聞荻声（當坐）　荻系や嵐てるもこ社の之恋るあもよるこ為のむ

宮の鏡恋　人彩もこつた和よもあくぬ庵流りろと人の彩恋彩と（ミえ奥）

行路市　道の人やなの風のこ（ル一本）ろ市と人なき草ハつりく（く一本奥）

廿二日修理大夫の家よく読ふあるこふ（三一本）

秋夕　ゆくこのあさいのあるゆひ秋ふもこぬ社の夕雲

恋枕　保ゆつ枕のもこかろくらを名を流よ宮ん

暁山　ふて嵐あつさいつる早ほく晴る家の松の早ひと

山寺煙　寺山の岸木の枝やもめんをの坊くく烟ほ

廿四日三井もにあかつたくふ佛院信秋長（く一本）

等坊くく読くあこふ

秋夕情　みるまにたの雲のそを秋ふ社の早ひの雲や海らむ

宮の秋待恋　月待人よりくく人なり九のあくるる社のよそ

秋眺望　ゆくくる雲なの山の人海よ霧ふきゆ人雄のりの風

廿七日同坊くく読くあこふ

初秋晩涼　彩雲ながれ夕日かたぶく山なかぬるあるを涼しき秋のそよ風

對月忘憂　住ること世をうきものと捨てむとせしかの世めくるを捨てむとふ月の下を世

待空恋　まてしばしまたしらぬ人をもたのみ空に恋ふるをうらめしき

市旅客　しらつゆ旅の人とかるの秋のかけまてつれて出る新市

廿八日立智院住僧基善坊にて碁（甚本）ふ

草花盛　いろ風ふきなびくの夕露よりそきてうつしもの草

秋恋恋　むすぶてもなほ袖の池烟立あらやのすのやくふき

秋暁山　松末月ふかくつる巖とう霧立ぬあつきの乃山

廿九日茶屋にかつてはるふある人まはんむ川ふ

ふの教ふるくいのうちもたのうとあくよむとも

なくあるもしをまひうきつとうくはこひすいのち

あくふかるむ月ふなくやとこひふくふのひるし

せめくのほいなるとくかきつるめく祝紙こ

ふせてのき清くうもまものるをてもみ清け

きるをうををうるうきくあるをよ芝て

しかのる日宮上人かのくめとも法も経一紙の

きをうをはつみよ一そかきてはるしよ

法をしはふ

水をきまぬくかの清すをかき歌をる法のもも

晦日今宮にて法華を不社勢秀雅の坊にてよみ

かくれゝよ

初秋風　ゆのつゆも山の尾むすの花を毋ゑの杜のさつせ

寄隣恋　かへさゝと思ふ隣は夫もなし以和名やさゝ山をのたれを

山家松　くゝ日そ雪宿のひくうの山和ゑ山のこるさはるさる嵐と

八月四日右京大夫の家の月次よ

夜鹿　和を寄みたまくゝのこゝ山杜り庵のあ下るらん

月前露　杜風もさゝ宿月も宿ぬ思ひの寄ハんゝそおく

絶恋　契ハこゝ分ゝさゝかくふ狩をかる杜のうひち

披書知昔　よむ文のちさゝのさ末の受よあいぬとさも深ゝう

五日修理大夫の家ゝく読ゝみてよ

雁交霧　みちちの霧の志を羽ゝ山さ杉の霧ゝ下る厂糸

暗夜稲妻（暗一本）　思ゝくもんハやゝのゝ寄ハ神名ゝの妻の山和の稲妻

寄雨恋　よゝふゝ山ハゝなゝの風ゝつゝんゝゝ

故山猿叫　猿さふふゝわゝハゝくゝゝのゝを猜ゝゝく

十一日好月　宝上人の坊ゝくゝおゝみよ

行路薄　ゝ山ゝ山ゝ尾ゝ結ゝ人ゝゝ神のゝみ

月前遠望　神ちゝ信ゝ拾ゝ（そ一本）ゝ（ゑ一本）ゝ月のゝ移の里ゝ

恨恋　ゝ人ゝをゝゝみのゝゝゝ路や我ゝ神ゝ弱のゝ衣

水郷　月やゝ里ハゝのゝゝ世ゝ河ゝゝゝ杜の春ゝを

十四日伺公入道浄元の堂ゝゝ下ゝく月次ゝ

[illegible]

十五日大光明寺の月次よ

夕鳥（初冬）　遥ふ母屋まの浦の夕月夜そをもるふける尾の糸

雨山月　三笠の杜のこのみ也る葉もおもをぬ谷を文るよ杜月

秋（一本ニ秋言志）　恋　もちさよの杜の見ひの信を恋ぬ人ともるやとふるもちもも

初秋月　いく秋のもとのもとせくあるきまし一本の宮ゐる分ともをもとせく一本

七ハ狩涼しく初ぬくる杜の初風くみうの杜の月

聖久恋　おの世もおそをもぬあるる初かそやちる恋ハかよん（も類　に月上）

秋夕浦　いそうらもる遥人ふあまや枝も多ぬおのうら

同初芝庵　人ふ歩ふ清ふよみ一首ふ

已入月　よ里まて行やとん月入一ふのあるの杜のもろ人

入後暮月　杜ふよまの杜を伊ひ入ふ家の月もさし

寄月恋　うつりやもうふ[illegible]ふ初もみよの月のんそをふ

十六夜樂の月次よ

遠郷月　ふ初遥ふ里のあ里挽もるふをふ寄の月のけ

寄の月恋　ふ里ふハをふ月の新ふせるふん恋の杜のやつをと

月前夢　新をふふ川へををぬる月ふるふ人ふのふ初の月

当坐
不知夜月　光をも名をもはるをゆつるにしたがひて
月前荻　荻ふかやはるの天飛雁きくの秋風
月前鹿　をりをりの入るさの月の角さるをもきくほしをかなしみ
窓秋月　秋の窓の月はかたぶくまでふるひとをまつ
十いる七條の金光寺にて人々をすすめ
田　鳥　風ふくあらはきのかぜにつれて
秋夜長　ひやうぬ秋の枕をうつやのはちすぬきよの閨
遇不逢　まてしをうらえくあるさいつまの坂のたくふん
古寺鐘声　世のをさめ金のむかしをさかりをいとけ入あひのちぎ
十九る　ふるさと浦をうつす人ぬまをかくる月ひとく

百そのふのふ二つ字の名号を一字つ冠まをきてを
められ中ふ

立春天　名をうるきさらの羽衣みきさえくふやちの新まあらん
餘寒霜　立のつるもの風のみの雲たりしたよみをそふむ
簷梅　村鳥の羽風けちらさ新庶よ雪はのさもの抜うまをそる
暮春藤　春も夜まかるとけちのうもむされのをかをるら雪
枕邊虫　月ふくるの雲の虫消し人も枕もふるさ世の秋
関残月　あけぬまの浦まのるやおうろくさの雲をうら低の月
遠紅葉　ふるそやぬふかをの思川さくふのあれのもみちを
暮秋雨　秋いぬ狩をのこせやふれを雨ぬ時をしりへふる

廿日草庵月並よ

月照獨舟　古江なる水にも月ハさしなから舟のたくひつましきさそふ漁の影

秋日村雨　秋の日をさそひきえハうちしく村雨の峯の木末にかゝる山そふ

押涙悔恋　袂とハ悔のやちよを涙そてみくゝるなみたゝしと我なる

関月（當坐）　月のゝる影のあらせせきもるきのまゝの関屋のやとの波風

寄風恋　別ぬるハ手枕とさき槙の戸のすきまの風そなお身にしむ

懐旧　ありあけきむかしをみしめよハ涙くらハぬ時のまもなし

くる日廿日も定家つの所に日また（まうでハ一本）帰への為ふとく

修理ありけそ又秋のまもとめくしとつるおもと

一字つゝ句の上にあきさく秋のおよむ返しとてむかし

よまの秋し中に

路とふもえゝぬよの侍ハゝふまたちそ又秋のきつゝせ

廿一日（二一本）秋よそ持病おむつしく覚えていつくへも出

ま九月にのる修理大夫（入道一本）とふらひにおもしろく婦あつ

もとく縫冊けふあつしいなくらく三十そうお（の中に一本）

あつらし（ナシ一本）中に

鴈過湊　むれきをと秋の湊よ津くへおさくるさひゐる沖つ人の船

擣衣寒　宿ちえぬ川らの秋の霜のよに涙もあやうつたえそゝく

寄衣恋　救なゝぬ縁の衣秋をまつ涙あてなるゝもの心

塩屋烟　遅きや佳ナつやの塩干のかくもり燒としもあさき烟ちて（て歟）

廿日草庵月次ふなくもと人〻もさまてしのぶ

いなびのくさ〻

田　鳴　なるさ〻なのてやさみすの田面の暗のおそふまさ〻

紅　葉　みのまはものトむもとどやハちほの島のきみちそ

出　栖　ほのむ松の落ものて宿を荒もちこ人も回まこ

當坐

閨　虫　我ゐふさ〻なるむしや閨ちさて弱ちあるそのふまふん

窓垣　恋　あすめさ行のさい垣をまをさみすの月の宮居の川せ

杜　柏　みるさのえのこのむ柏のつまこふさ〻ちさ乃あさ〻の

江　菅　逢ふ毎時ちさめさ〻ふ逢の入江のまをかぬ日も

廿二日明常ものさよ

秋夕傷恋　いせめく秋夕の一さも三重ん〻逢ハ本るゆる月

七楽

暁更月　絶恋ちなるさちをおちわさてんさてを四乃月

相思恋　ふも〻ふ〻ふんハつ〻孫やふのもかのをの人めちさを

名所市　ゆ〻人も市ふ坂ちえさうさてあ一の四面ゆさ四て人の孫

九二末

廿三日右京大夫家の月次よ

小鷹狩　しのさふむ〻ちさ〻衣をそ四の野ちかつんをら

炉不留　ちさ〻もちよりちの関ハなぬをてさふぬ社やをん

當坐

窓鐘恋　鳥羽むのかも一ちの社の末ひ〻の為よ沼る達小

夜　鹿　つま恋のさ〻のすの孫せ松もふさてや庵のゆ四ん

紅　葉　交さ〻くもちハ世の中の人ものみちにさよう松をよ

初水郷

我そこに住まかくれぬ池の水もふるもはてみやこまる
廿七日刑部大輔家にて

紅葉

ゆくかはるこの秋ごとに人をくるいろはもみちにぬれぬ
秋暮恨懐旧

秋ぞ行くかへるもぬれぬ鳥の声ハタ乃やもものこゑ
ふるさとし船もふるかもとをくとふ風もいそぎ
ふるさと

十月のそらめ思ひ出ぬ人のあるこゑ
ふるさとの尾ゆく波のあとの中ふ

初冬朝

ふるさとの波の毋ふつ毋ふ波の花を

月照網代

水屋のそらの木葉のよるみえく網代の布よ氷る月影
寄風恋

ゆくかはるこの風をもつかはやぬるもむ
山家水

谷ふく嵐そこ一本
懐旧涙

まこと世よ伊せ屋つる神代屋ふるこ八こえぬ
十二日人くよこそこそ山のゆ葉とみ行こく
夕ゆ建仁王寺霊雲坊こ一本元亀二本

落葉

ゆくくちこみちこ世こるゆ葉やこの夫かん
尋恋

たのしとちこぬ日人ぐもたまつん地と杉ゆこぬ門
古寺

ゆくこく嵐の嵐もこ世こ入あしの波をつひこ
十四日明常の月次

落葉　[illegible]

千鳥　[illegible]

初恋　[illegible]

落葉風（當坐）　[illegible]

恋帯　[illegible]

社頭榊　[illegible]

十七日上総今の家のこころ

冬暁霜　[illegible]

閨上霞　[illegible]

宮の月恋　[illegible]

江舟（類ナシ）　船人（そ一本）　[illegible]（うう同上）

千鳥　[illegible]

宮雲恋　[illegible]

古寺　[illegible]

廿日草庵月次

夜時雨　[illegible]

寒草疎　[illegible]（そそ一本）

野亭鐘（當坐）　[illegible]（そそ一本）（上類）

薄氷（當坐）　[illegible]

尋網代　毎夕よりてそなるものの網代を尋ぬる人の
近　恋　我が恋の歌をそなたへ送りつかはせしの陸奥
山　寺　もの名もいさもしらぬ山の奥の杉の門よりぞ
　　廿三日　左京大夫家の月次
落葉混雨　風の吹おろす花の葉の八重のそなたの時雨
寒帯霜　冬の原枯り初めゆるそなたの孫ぞ冬の
羇中憶都　住なれし日をもみしの浦の人なくもまさるそなたの
当座　初冬雲　小雪ふる時雨ぬるんとしたるそなたの初雪
誓早梅　梅の色をまねの風ふきてそなたの初雪
難忘恋　忘れ形見のなんぬるまでぬるとやしる

峡猿叫　猿の声山の峡にこだまして岩ほよりそなたの猿
　　廿四日　俊定卿家の月次
時雨過　夕暮の時雨過ぎぬ山の端の月のそなたの
暁水鳥　いそがしやそなたの山の暁の水鳥
関屋煙　関屋の煙ぬるのの夕の煙やそなたの
当座　松上雪　見ぬ人の孫ぞ昔の友まつやそなたの雪
埋　火　埋火の炭ぬるのの夕の風のそなたの
宮の鶴恋　恋ぬるのの孫ぞそなたの鶴
野　（外鳥一本）　ぬるのの夕の風のそなたの
　　廿九日　権律師心敬唐画の油の地の絵（ナシ一本）（円上）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕霧雪と匂ふも梅ぞ[illegible]

十一月五日洛陽左文の家の月なみて

石間薄氷　[illegible]

野徑深雪　[illegible]

宮宿木忘　[illegible]

當座　歸雁　[illegible]

初秋風　[illegible]

柏霰　[illegible]

立名忘　[illegible]

曉眠易覺　[illegible]

六日大老四月次

寒夜月　[illegible]

山家雪　[illegible]

歎身忘　[illegible]

當座　初冬朝　[illegible]

竹間聞霰　[illegible]

恨後悔恋　あさましのあまのまくるめとおもんたゞかるもに乱つゝ

鶴立洲　沖つ風ふけ入江はなきさくる鶴もたちぬ洲崎にこゑつれて群ゐる

九日眼阿ともの法楽とてよめる歌

網代辺氷　氷のいふきあじろの波は木にむすぼほれぬやせの川浪

寄草恋　露よそを見ぬ契にまち侘しけふの下のみとはまし宿

行路市　月清き境ハえらり市人のおもひてつゞく宿の私すに

十日右京大夫の家の月次歌

時雨　ふるさとを思ひ我戸にもかきこえぬ時雨かなしき寒き月

水鳥　鴨鳥の浦に立ちし水もさハあるもかくばかり時ぞしるや

恨恋　かくしつゝ我まの見のとのまに出くる恨ぬ葛の下はふ

田家鳥　庭もはし田中の古井汲絶く持るみつに鳴あさる

十六日出楽ちの月次歌

落葉　ふきもみぬ風の色とも移してや庭の庭に木の葉をゞらん

霜夜鶴　月落く氷る入江の霜のうちに鶴の羽かはしもさやくよのまま

偽恋　とくとかす色ハさあれも偽のあまのたはことをなにたきれる

当座
初冬山嵐　みな月くの山のあらしそ吹くる木葉時雨ハ秋のまゝにて

冬月　いさ月もいざさらばものてん天の原にすむ寄るとてよる月の影

寄木恋　結ひてしこそもかへさぬおくら山やとをしき木の碑ぞこそ

旅宿聞雨　くちそへき我もの川の岸床よ夜の雨をもたぬ旅ね

十八日仁和寺蔵勝庵もとにて人々よ修理大夫入道歌

日ごとに次第に清らかなるこのあさぼらけ

落葉　ちりはてぬ木のもの衣袖ぬれぬ（一本歌）ふるさと世の民のおもひやせん

雪　ちりやなほ冬の海もちりぬるよの雪よりかさなる衣笠の山（一本歌）

祈恋　まへくもちりそかくさまの雪よりおくをわが安くくくん

社　社あまたく神やいつくしみまもるゆるあるへくもふしとくて

廿日草庵の月次よ

水鳥多　海ちかる月もとゝ松ゝ新のやるゝあなさ浦のうき鳥

雪中行人　まる人のむらふ路きふ拙ゝてやとふむ雪のさゆるたのゝ

古寺嵐　ふ野ふ山雪かくる樹つめふ嵐ゝてとうつをうつもむ（七一本）

時雨交風（當坐）　言葉ふ雪とふりふさゝひて時雨ふくる木枯の末

子拾

寄冊恋　流こゆる移りの冊きゝ日てのうるせくるゝ思絶あん

孤夢易覚　数もくる独を思ふ恋くしくよかくゝぬるゝ夕くうつと

廿四日明栄る月次よ

枯野霜　野ゝ人ハ皆烟ゝなむ新ゝ新さゝもゝ雪ゝまゝぬ雪葉も

江寒月　雪落ゝ世ゝの枯ゝふ霜ゝ月の面江のあゝ野のけ

寄衣雑　ゝゝむゝゝ衣の袖ゝ紙ゝゝゝゝゝのやみのゝの面

落葉有声（當坐）　梢ゝもくハあしの葉のゝの雨ゝ（小歌）ゝむ屋のあゝ

鷹狩　鳥ハ狩おくゝふ屋ゝたのゝ屋ゝふのゝ

旅恋　ゝ思ゝ恋のゝ人やゝまゝん人ゝ松ゝゝの雪の軒を

田家煙細　小山面のかゝ屋のゝゝむくふも烟ゝ狩る紙のゝ

廿七日右京大夫の家の月次

行路深雪　道の見えぬまで踏み分け行く雪の下に埋もれ行く

寄橋恋　めぐりあへつゝ渡りかねぬる橋の柱の朽ちぬるまでも

薄暮眺望（類ナシ　遠ニ本）　夕日さす松の梢に雲晴れて水よりかなたの海の遠

古郷夢覚　月ぞ見し世にすむ人の夢の中に昔語りの面影

廿八日修理大夫の家にて遇恋のよみ侍ふ

水鳥　鴨鳥の羽の青羽のむらぬ色にもなる波の水の底

炉邊宋談　古へをとるそ語りつるくるの炭の下の火の

冬空恋　消えぬる木葉をとゝ（に歟）ぬ散りぬる中の山の

河筏多　末をそみ彦根の筏の竿の一ふしにて長谷川の

十二月四日右兵衛佐家にて遇恋のよみ侍ふ

寄覚時雨　あらん世のまゝにてよさ寄る時雨ふる人の心の変ち

遠山初雪　人絶えぬる山の雪のおもぬ中に会ふ人の

絶後驚恋　うき中のとゝえの橋とふたなしと恋ふる人を

寄鏡述懐　みもあつ人境の鏡をおりて恋ふ人の

五日修理大夫の家の月次

寒松嵐　木葉をくゞ川ふみ分る松の嵐そ吹きぬ

遠炭竈　吹くるゝも接ぬ煙やくゝ朝そ白くたちのぼる

山家路　山里ハ雪かくれのいとなみもすむ人のさびし

冬野露（當座）　宿りなき野辺の露もむすぶ草の花の名あり

冬恋　待人もまたさゝらん志つの屋の袖の氷をとけすなりつゝ

冬床　ちきりをせんころかゝの床中に冬さえなるさかりの夜

冬神祇　神垣し道行ふるの辻社ほそきの松のこと

六日上総介家の月次に

井氷　汲人まつ井筒よかく水結ひつらゝ繁き冬の山陰

炉火　吹きをさぬ室さへこもるゝ埋火の灰立まよふ下風

稀恋　たまらめやとの家の星の影さへん雲のとひ消つ

當坐
冬曙月　冬の月光をさゆる暁の氷やよその（き 一本）たつまさゆらむ

冬床巡　小筵のちりさへ払えはまた涙さゝ涙の床の水に

冬眺望　夕日影なほ見えくる雲よそへうつさぬ枯野の上の嵐の山人

孚稚

七日小野宮にて宗匠くる人百首の法楽まへに

立春　秋なるのさ空の白ゆふ霞む神のふもとにやたなひくらん

栽花　誰もとの人の色にほの糸をうつむも葛の宿の夕くれを

夏夜月　短夜をいふなの行くる夏草のかくれゆる月影

野萩　行末よも紫かつる宮城野のもとの萩も秋や見えさぬ

烁夕　秋なるぬ霧の露と集めてもうらさそふへん方やあらん

河網代　めくりさて（も 一本）たてるも沸しうち汐やあうろ並に氷の年

寄風恋　うら袖よやらかせてうらみぬらんもつてる風も句ひとむぬる

寄川恋　紙面のうの手枚うそしとるぬ契やあつそ流れの

旅行　袖やらん袖やぬるゝさん海山の旅路もしらぬ道の風

述懷　このもいつるの月をいとなんなる海の岸に風月の神

九日大光明寺の月次

水鳥馳船　この岸に鳥のつとをさし舟の水を碎くなるさゝ波

炉火似春　みやこのとをる堀川のもの眠のなかのなる夏

暗後遠水　月出る山陰をさし水かゝるもつゝみゆるなかの下かな

竹辺聞霰　陰さゝの行のそゝぎ陰をしぐるゝ霰の音

逢後切恋　はるるなるもつゝ逢まての命の深と又やのさゝん

江雨驚飛　さゝとつる古江の松葉にそゝぐ雨のあしに驚るゝ

十月晦日一色左京大夫教親卿に申せられ

しるべのくもりはてぬ世に仕ふ身に

うゝ陰みよるをさつ雲しらく

夜舟の入江をさすつの浦に潮の満て花の浦に波よる

十一月次

懸樋氷　山里のかゝひのまゝの九月舟たゝへし水に氷をとゝ陰

狩場雪　かゝる場の神ゝ星をとゝのとゝへしたゝ雪の一村

江上舟　陰やゝやゝとゝ小舟の綱をひく入江の里のとゝ

霜　ひぬるゝ夜陰さゝの山のとゝの星ゝるゝ月のとゝ

神樂　紙ゝとゝ長なゝて縄くゝ紙やの夜ゝゝ

別恋　ゝ風もおゝてゝゝみをしのんゝ別ゝゝのゝ

旅宿　陰なゝん地へゝてゝるあいやゝゝゝゝゝゝゝ

十二日あるじにて続歌ありしに

冬江月　みちしほにあらそふ波をさそひて入江の山に月そかくるゝ

冬夜衣　冬の夜はきぬをかさねてもはらはしき山里の家の衣おりもいくさてゝ

寄柱恋　恋しさにそへて柱によかゝりしやむかしに西の歌をまつ

古渡舟　むかし誰かあまり小波もすゝめのわたし渡に舟やならさん

十四日明栄あるじにてよみはべりしに

時雨　いくたびか時雨のそらにゆきかよふ雲のめぐる里人

神楽　うたふなる緒やの小篠をとりて東の宮の社のなか

尋恋　尋ぬる人をまつ人のかくし文さへなくて文おくりてかひやなからん

樵夫　山路よりけ薪さすをの夜衣あるや孫まちのひとへ衣説

出湯　絶間なき雪の内にもわきかへる湯の庭あたゝむ冬の山伏

十六日右京大夫の家乃月次に

冬朝　あさ川やうへの氷のしたゝりに流るゝやまの中へ流らむ

冬月　さゆるまゝ光を流るゝ人やなきて月の影の末乃ふる道

契恋　世のなかのけしきを孫をたのむる契にも八重の霞のあすや恨ん

渡舟　やすらひ舟も時のまに梓弓ひくまもしほのやほ乃おひ風

廿日草庵の月次に

寒夜衾　磯枕あまのぬれ衣風さえて波のふすまをかくる浦かな

年欲暮　つきなくもいそぐ年のをしむのをしく我方もさまさまなるとやらん

念願恋　いとまなき袖にもおなじや涙つゝあるせいふつれならんとも

当坐
芦間鴬　いつの世よりつたへ（ら一本奕）きぬらむなにはなる芦のはのまにうくひすの鳴なる

佛名　ときくへおもふ三世の仏のその中に我名やおもんする人もなし

祈請恋　神かけし恋はまさなきの風にしも吹ぬみそきは世にもなかす

（奕ナシ）
古寺残月　鐘の音におとろく寝覚る古寺の月のかたふく山のむかふる

廿六日修理大夫の家にて当座といへるいつのとしも
あまたし詠哥乃中に

冬夜嵐　吹さむ嵐はあるみのおく山里かくれのよその白雪

都歳暮　歎ともしれぬの色路にみる斗民のつねならぬくるゝ年かな

馴恋　君か手を我もとなれてみいける世は深き契の言葉なかりそ

名所浦　住吉のうら浪のよくかへるその松の世々に神やまもらん

廿七日大膳大夫の家の庭にかゝる藤の松をうゑ
うつしく住吉の社ともいふへきもて侍るを見て当初
飛鳥井中納言（ナシ一本）入道　祐雅　よみしを書きみつ小倭詠
せられしかは

年ふるきは神の（うつと一本）祝ひとうつす宿は世々に住よしの松
小みとしをつくにわかそへきよし杉かいし付侍るか

二くらに神やまもらん栖移れかものそのよみしの松
此松の（社一本）それに山里をつくりたかしいてましに一よみ
みこゝにこよしや中さまし　社に　歌をさくりかく

（け一本奕）
寒松風　年重ねき歌の宿の松か枝を吹入はきみよしの浦の神風

雪　[illegible]（うき一本）[illegible]

待恋　立ぬるあつき袖の松のたゝ光（ナシ一本歌）[illegible]（の袖日上）

船　湊出の大舟おくるゝ舟にも篝刈つゝかゝるうゝ人

神祇　神まをゝ八重の雲ゝ八ちをゝ八重の雲ゝ菅の笠ゝ